

# ポーランドにおける命の窓

## たった一つの命を救うものは、世界を救う

トーマシュ コピトヴスキ（カリタスウッチ大司教区 スポークスパーソン）

命の窓 (*Okno Życia*) —ポーランドでは Baby Box をこう呼びます— は赤ちゃんを自分たちで育てることができない親が匿名で利用できる場所です。命の窓というポーランド語はとても良い意味を暗示します。命の窓は新しい機会のために開かれた場所であると皆理解していて、人々はそこで希望を見つけることができます。ほとんどのポーランドにおける命の窓は、ポーランドにおける最大のカトリック教会の慈善団体であり、もっとも有名かつ信頼できる慈善団体の一つであるカリタスの傘下で開かれてきました。

ポーランド初の命の窓は、2006年3月19日にクラクフのシングルマザーのための施設に開設されました。命の窓は、前年に亡くなったポーランド人のローマ法王ヨハネ・パウロ2世を賛辞し記念するものとして開かれました。彼は偉大な命の守護者でした。それ以降、子供の命を救う可能性のあるものとして次の命の窓が開かれていきます。Sisters of the Holy Family of Nazareth (ナザレの聖家族の修道女) が、ポーランドのクラクフにあるその施設と命の窓の世話をしています。現在のところ、18人の赤ちゃんがその窓に預けられ、救われました。

直近の12年間において、ポーランドの55都市に60以上の命の窓が発足しました。2009年は特徴があります。34の命の窓が開かれました。ポーランドカトリック教会の牧師の仕事のモットーである「命のケアをしよう」が2009年のその行動のインスピレーションになったからです。このため、2009年にポーランドカリタスの44の地域／司教区の内34カ所において命の窓が開かれました。

ポーランドにおける90%の命の窓はカリタスの保護下にあります。残りは個人、市議会またはその地方の病院により開かれています。通常、命の窓を設立したい人々や団体はカリタスに助言や援助を求めます。

ポーランドの命の窓の3分の2は女性の集会所にあり、修道女がそのケアをしています。命の窓の15パーセントは病院にあります。残りは児童養護施設、シングルマザーのための施設内、または福祉センターにあります。これらのほとんどがカトリック教会の所有地であるか、教会により運営されています。

これらの各場所にいる人々（修道女など）は正式にはそのような活動の準備はしてはいないものの、プロによるケアを受けることができます。彼女たちのこの分野における能力は疑いのないものです。なぜなら宗教上のケアやお互いのための自己犠牲の精神から行われているためです。このような理由から、彼女たちは昼夜を問わず常時命の窓を世話し続けているのです。救われた子供たちの命が充実することこそが、このような努力に対する最も価値ある見返りになります。

直近の12年間（2006-2018）で、140を超える子供がポーランドの命の窓に預けられました。そのうち18人は、最初の命の窓が置かれたクラクフにおいてです。17人はポーランド最大の都市であるワルシャワ（首都）で預けられました。Łódź（ウッチ）大司教区においては2009年から2016年までに4つの命の窓に8人の子供が預けられました。

預けられた子供たちのほとんどは新生児でした。通常、赤ちゃんは良い健康状態で、服もちゃんと着せられ、余分な赤ちゃん服やおむつも添えられていることが多かったです。

ポーランドにおいて親が子供を命の窓に預ける主な理由は、両親の経済的理由、親としての未熟さ、社会的拒絶を恐れて、子供のよりよい生活のため、片親の評判を気にして、母親の年齢が若い、子供の父親からのサポートがない、両親に住居や仕事がない、子供の病気、母親の病気、望まぬ妊娠などです。

ポーランドにおける命の窓に対する最も多い批判は、命の窓に赤ちゃんを預けることができると親が知ったら、子供を育てるという基本的義務を果たさない親の数が増加する可能性があるというものです。母子ともに危険な、孤立した出産を助長してしまう可能性があるという人もいます。子どもの出自を知る権利を侵害すると批判する人もいます。しかし、ポーランドの多くの人々の社会的意見は、命の窓は子供の命を救うというものです。否定的なものよりも肯定的なフィードバックが社会から得られています。つまり、命の窓は子供の生きや死を防ぐ現実的な方法だということです。

Tomasz Kopytowski, カリタスウッチ (Lodz), ポーランド